かわいて、またぬれる

金 サジ 個展 Kim Sajik Exhibition

二〇一二年四月三日㈫――十五日㈰　ギャラリー・パルク

「かわいて、またぬれる」。当たり前に繰り返される営みの中から、金サジによって切り取られ、留められた「あまりに遠く・大きなもの、あまりに近く・小さなもの」。

金サジ（1981～・京都）は、写真を撮る行為を「会いに行く」という言葉に置き換えます。

遠くに出かけた先々で、偶然に「出会った」自然・景色・人間・生き物、そこにある営みを真正面からとらえた作品は、その出会いの記憶や気づきを留め、それらを反芻し、深く対話するための記録であるといえます。

また、その作品は対象に心と身体が確かに動いた痕跡であるともいえます。本展に展示されている11点の額装作品は、おもにローライフレックスを用いたものです。「ブレないようにカメラをしっかりと抱え、息を止めてシャッターを切る」という一連の動作を経た作品からは、出会いから撮影に至るまでに対象との間にあった緊張関係を感じさせます。

一方、壁面に直接貼られた構成作品は、金サジが日常的に持ち歩いているデジタルカメラのプリントを中心に、テキストや印刷物、何かの複製物などを組み合わせて構成されています。自身の日々の暮らしの中で、偶然に出会った一瞬の光景を逃さぬよう、ブレやピントも気にしないかのように撮影された作品には、その時の息づかいを伝えるかのようです。

それぞれ作品にある呼吸の有り様は、いつしか鑑賞する私たちの呼吸をも引き込み、それは対象との出会いの瞬間をに立ち会わせるかのようです。

金 サジ / Kim Sajik

1981年生まれ、2004年 成安造形大学卒業。
写真を中心に作品制作をしながら、金一志韓国伝統芸術院の一員として様々な舞台に出演する。

ステートメント

ずっとずっと昔から続いている、生の記憶。
生の記憶があるから、人は祈りを捧げたり、大自然を見て涙を流したり
するのじゃないだろうか。
記憶にひっかかる彼らが目の前にあらわれたとき、
身体、こころ、両方に響くなにかがある。
初めて出会うはずなのに妙なリアリティを持つ彼ら。
自分の遺伝子の中にある生の記憶が彼らを覚えてるんだと思う。
地図をひくように撮った写真を見つめる。
自分が出会った記憶の中の彼らを手繰るということ。
生の記憶が自分に何を教えてくれているのか、知りたいと思ってる。

展　覧　会

2011 個展「瑠璃も玻璃も照らされている」（立体ギャラリー射手座＊京都）
2007 個展「imagination lifted」（AD&A galley＊大阪）
2005 グループ展「In The Room」（成安造形大学内ギャラリーART SITE＊滋賀）
・ グループ展「In The Room」（gallery sowaka＊京都）
・ 公募展「東京コンペ#2」（丸ノ内 ビル＊東京）
・ 個展「IDENTIFY DREAM WITH ME」（画廊 編＊大阪）

公　演

2011 金一志韓国伝統芸術院　自主公演「プリII～巫女の足跡～」出演
（大阪公演：山本能楽堂・京都公演：大江能楽堂）
2010 金一志韓国伝統芸術院15周年記念公演「縁然」出演（京都府立文化芸術会館）
2007 大韓民国国楽コンクール長官賞受賞記念公演「金一志の伝統舞」出演
（大江能楽堂＊京都）
2005 関西韓国芸術協会主催「韓日親善の夕べ」出演（神戸文化ホール中ホール）
・ 金一志韓国伝統芸術院十周年記念公演第二幕「毎人悦之」出演
（京都公演：府民ホールアルティ・広島公演：西区民文化センター）
・ NHK主催「日韓友情音楽祭」出演（大阪NHKホール）
他、多数

賞　歴

2005 公募展「東京コンペ#2」ビジュアルアート部門 入賞